

Gerhald Podskalsky: *Theologie und Philosophie in Byzanz. Der Streit um die theologische Methodik in der spätbyzantinischen Geistesgeschichte (14./15. Jh.), seine systematischen Grundlagen und seine historische Entwicklung.*

C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München,
1977, pp. viii+268.

大 森 正 樹

我が国においてビザンツ学は歴史や文化の面において研究されることが多いが、その思想や文学の方面の研究は今のところ殆どないに等しい。ドイツでは Krumbacher や Beck のビザンツ時代全般に亘る膨大な文献を駆使した記念すべき労作がある。しかしそれらはどちらかというとな様な文献を時代的に著者ごとに示した百科全書的なものであり、細く思想の流れを問うたものではない。ここに取り挙げるポドスカルスキーはフランクフルトの聖ゲオルゲン神学校に依りながら、ローマの教皇庁立東方教会研究所でも教鞭を執っているビザンチニスト・スラヴィストである。彼には既にパラマスのタボル山の光に関する論文を始め、著書として *Christentum und theologische Literatur in der Kiever Rus'(988-1237)*, München, 1982; *Griechische Theologie in der Zeit der Türkenherrschaft (1453-1821)*, München, 1988. などがある。

さて本書はビザンツ後期の哲学・神学の方法論を問うものであるが、大きく四つの部分から構成される (A—D)。まず(A)序論では、本書のテーマに入る前にビザンツ後期における神学と哲学の関係を問う。ビザンツでは哲学は異教ギリシアの学であって、神の啓示に取って代わられるべきものであるとするのが基本的な考えであった。しかしそれなら哲学はあくまで神学の婢女として、あるいは自己主張をなすべきでない代物として背景に退いていたかと言うと、そうではなく哲学の存在はやはり気にかかるものであったというところにビザンツ的心性の特徴がある。著者は例えば十四世

紀の総主教フィロテオス・コッキノスがニケフォロス・グレゴラスを駁する書の中にその揺れ動く気持を読みとっている。神の啓示に勝るものはないが、しかし人間理性の産み出した哲学をどう取り扱うかをめぐって、一種の苦悩がビザンツ後期を覆っていた。スコラ学の侵入に対するパラマスとバルナムとの神学的方法論をめぐる論争からゲンナディオス・スコラリオスの神学と哲学の統合の試みに至るまでこの苦悩の思いは貫いている。しかも哲学の導入に反対するものも賛成するものも皆共に教父を論拠としてもち出すため問題は一層複雑となる。しかし概して論争の場合でもバルナムやスコラリオスを除いて、そこに体系的な論考というものは見られず、論駁のための論評とか偶然的な補説の類のものが多く、全体的把握が困難なことが指摘される。

(B) 歴史的一体系的基礎では、著者はビザンツ後期の学的方法論の問題に入るが、まず四つの根本的問題、即ち (a) 哲学と神学の概念、(b) 修道制と世俗の教育、(c) 神学の各派、(d) 神学におけるアリストテレス主義とプラトン主義、を措定する。次いで(C) 歴史的展開では、後のパラマス主義と人文主義に見られる両極端を理解するために、ギリシア教父のうち建てた体系を吟味することから始める。以上の問題性をもって著者はこれまでの先達の業績を一瞥した上で、個々の問題に入ってゆく。

まず (a) の問題では、アリストテレスとプラトンがこれについていかなる考えをもっていたかに触れるが、東方ではそもそもの始めから宗教と(科)学について全く無地の状況から出発するのではなく、既にある方向性をもっていたと言う。従って知識も *ἡ ἐξωθεν σοφία* (異教の知恵) と *ἡ καθ' ἑμᾶς φιλοσοφία* (わが方の哲学、われわれの哲学) の区別がなされ、それに基いてあらゆることが判断された。ナジアンソスのグレゴリオスの *ἀλευτικῶς, ἀλλ' οὐκ ἀριστοτελικῶς* (アリストテレス流ではなく、漁師のやり方で) という有名な言葉は、人間の文化や理性を卑下しないものの、三位一体の奥義の探究には不十分であるとし、結局は漁師の単純さの中に神の秘密は顕わになるとした最もよい例であろう。ビザンツに一般的な考えは神学は聖書と同じことであり(マクシモス)、聖書はしっかりと蓋をした長持のようなもので、特別の霊の賜物を授けた人にもみ開かれるが、人間的概念でそれに臨む者には固く閉ざされたままであり(新神学者シメオン)、またキリストこそ第一の神学者である(オリゲネス)とするものであった。

(b) では、平均的修道者は教義については必要最低限のものしか知らないが、何が正統であるかについては敏感で、修道制の神学に及ぼす影響は極めて大きかった。そ

れは(1)修道者は神学に学問というよりは実際の態度で臨んだこと、(2)伝統を守り、教会政治に関心をもっていたこと、(3)修道者が在俗聖職者よりも多く、教会の位階制への力が大きかったこと、(4)「天使的生」という修道生活が認められていたので帝国の政治から自由であったこと、などによると言う。

(c) 修道者が聖書や聖人伝、ギリシア教父の著作を読み、解釈し、それを真似て著述することが「神学研究」と考えられ、その他文法、修辭学、アリストテレス論理学の初歩が学ばれた。これがビザンツの学的状況である。

(d) アリストテレスとプラトンに対してビザンツの人は複雑な態度をとっている。アリストテレスは世界の永遠性を唱え、魂の不死を認めないとしたため快く思われず、他方プラトンは一なる神による世界創造や魂の不死を説いたために一般に好意的に見られたが、人文主義者たちはアリストテレスを偏愛した。しかし総じてビザンツは中庸程度の学者は輩出させたが、それだけに創造性は凝固し、独立した思弁は生み出されなかった。後の唯一有望と思われるスコラリオスのような学者はそれ以後生まれなかった。

次いで(C)「歴史的展開」であるが、ここではギリシア教父のとった方法論が問題となる。クレメンスやその他の教父が吟味されるが、総体としてギリシア教父は使徒以来の信仰の印、華麗な文章の師として見られていたが、一つの体系を作るには不十分で、相互に矛盾していることも多いと指摘される。偽ディオニュシオスやダマスケノスのような方法論的にかなり明確な線を打ち出した人も、ギリシア教会ではそういう意味で顧みられることは余りなく、せいぜい弁証論の範として考えられていたに過ぎない。

次にプラトンやアリストテレスのビザンツに及ぼした影響に関し、ダマスケノスを経てアリストテレスを好んだフォティオスにその考察は及ぶ。中でもプラトンを研究したミカエル・プセロスが古代の神話と知恵は啓示によって最終的な意味を見出すと信じていた。彼は哲学こそあらゆる学の頂点にあるという信念をもっていたが、学と信仰が衝突する場合には、啓示された真理に軍配を上げたのである。

続いて本書でかなりの分量をさくパラマス論争に入る。この論争の最初期(1351年まで)は西のスコラ学と東の霊性、人文主義と神秘神学の論争ではなかった。勿論神学上の論争であったとしても、それはフェララ・フィレンツェ公会議の失敗や政治的問題が端緒になっていたと著者は言う。著者はパラマスよりもむしろバルラムの方

に好意的であり、評価も高い。バルラームは三位一体の神学において三段論法的論証の可能性と価値をめぐって考察し、論争したのである。その際彼の論証は非常に正確で、学問的である。また神学上の神秘についてはそれを問わず、アリストテレス的論理でそれを覆う。そこをパラマスは異とした。では両者の論争を今日の視点から見ればどうなるか。バルラームは異教の知恵を評価し、ギリシア哲学をキリスト教神学に応用しようとした。偽ディオニュシオスを援用しつつ、アリストテレスの認識論を神学上の推論に関係づけたことは新しいやり方である。一方パラマスは広く教父を基として考えることを勧めたが、興味深いことに二人が同じ教父を論拠として異なった見解を出したということは教父の権威や価値に揺さぶりをかけたことになる。但しこの論争は後に問題の核心からずれてしまい、人文主義者は文献学の中に入りこみ、パラマス主義者はそれ以上の探究を止めてしまった。

こういう状況の中に東と西の対話の最後のチャンスとしてスコラ学の翻訳がビザンツに流入してくる。まず最初はトマスの熱心な翻訳家であったが、後にその反対者となったネイロス・カバシラスが取り上げられる。当初彼は翻訳したトマスに基いて論文を書き、また体系的秩序をもった方法論で論を展開したのではあった。これに対しデメトリオス・キュドネスは最初かなり慎重に東西の教父や神学議論を取り扱っていたが、最終的にはラテンの命題の方がより確かで、人間理性に適うと見てカトリックに改宗したのである。三段論法的推論も第一の真理を求め、見出すために人間に神から与えられたものであることを力説し、探究するとは自他に問い直すことだと言う。彼はビザンツ人としては極めてはっきりとスコラ的神学の本質的なところを掴んでいた。そのような彼にとって、ビザンツ側は依然としてラテン教父には無知で、無関心であること、言語の壁を乗り越えてラテン教父の翻訳が東に流入しても、この防壁が破られなかったことは深い失望をおこさせることであった。カバシラスにとって神学は種々のテキストの集成であるが、デメトリオスには真理探究への道であった。両者の違いは大きいと言える。

(D) 最終的結論。ビザンツでは教父が否定神学と肯定神学の区別を語るが、その両方の道を可能性の限界まで弁証論をもって歩み進めることを誰も試みなかったのも、ただ空虚な形式としてのみ残った感がある。このように中核となる概念が最終的に完成確立されることがなかったのも、神学そのものの限界も明確でなく、神学と霊性の間の区別も不明瞭なままであった。神学的方法ははじめから体系的でなく、異端の防御

のためにその都度論じられたに過ぎない。ビザンツでは制度としての教育機関が不十分で、聖職者養成の神学校も不完全であった。ビザンツは教父で錯っているという感じだが、そこに批判精神は宿っていない。却って一つのナショナリズムになっている。

以上の素描でもわかる通り、著者ははっきりと西方の視点に立ってビザンツを論じている。その限りビザンツの神学・哲学の方法論上の性格は極めて明晰に抉り出されている。一言で言えば、それは体系的視点の欠如である。ではそのことによってビザンツ一千年の遺産はすべて空しいものとなるのだろうか。西方的知探究の態度を是とする立場からはそうかもしれない。しかし今問われるべきは、著者も言う、神学と靈性の曖昧な区別に検討を加えつつ、ビザンツにおいて果たした「靈性」の役割を再度、歴史的、文献的、方法的に問い直すことであるように思える。

F. X. Martin and J. A. Richmond (eds.):

*From Augustine to Eriugena. Essays on Neoplatonism
and Christianity in Honor of John O'Meara,*

Washington, 1991, pp. xx+190.

R・L・シロニス

本書は中世思想の専門家たちの論文を集めたものであり、アウグスティヌスとエリウゲナの思想の研究に多大の貢献をなしたアイルランド人の学者オ・マラ教授に献呈されたものである。その論文の大部分は、アウグスティヌスとエリウゲナの思想を取り扱う（七つの論文と五つの論文）。三つの論文が、アウグスティヌスとエリウゲナの思想の背景を成している新プラトン主義をめぐる問題を吟味する。そしてソルボンスの J・ペバン (Pépin) の論文は、中世の宗教的な絵画や彫刻における象徴的表現という美術上の問題を取り扱う。この書評では初めに新プラトン主義に関する論文を紹介し、次にアウグスティヌスとエリウゲナに関する論文の内容をまとめ、その中心的な考えを紹介することにする。

A・H・アームストロング (Armstrong) は、三世紀から六世紀までの宗教的・新プラトン主義的思想に見られる否定神学と肯定神学の緊張について論じる。彼によると、キリスト教と無関係な新プラトン主義においては、肯定神学よりも否定神学の方